

世界の檜舞台で活躍する日本人 第三回 演出家 伊香修吾

日本人演出家が世界に出ていくのは至難の業である。その上それがオペラ演出となると不可能に近い。その分厚い殻を破って生まれようとしているのが、伊香修吾だ。『朝日新聞グローブ』4月21日発行号の「突破する力」でも紹介されたが、来年1月5日にリトアニアの旧首都カウナスで世界初演されるオペラ『桜の記憶』の演出家として海外デビューを飾る。

このオペラは、1939年から1940年にかけて、リトアニアの日本領事代理を務めた杉原千畝を題材に作られたものだ。人道的判断から多くのユダヤ人を救った彼をモデルにした作品は今までも多く作られている。杉原氏没後4年目の1990年に出版された杉原夫人の著書『六千人の命のビザ』をきっかけに、テレビドラマ、ミュージカル、演劇、オペラに加え、展示会など枚挙に暇がない。しかしこの『桜の記憶』では、杉原氏の業績を讃える潮流を越えて、未来につながっていくような作品に仕上げたいというのが、作曲家権代敦彦氏と伊香氏の意図だ。

リトアニア人の台本作家リミダス・スタンケヴィシウス氏は、杉原千畝の没後、リトアニアに招かれた杉原夫人が領事館跡に記念植樹した桜の木がリトアニア中に広がっているという事実にインスピレーションを得て、擬人化した桜を作品の中に登場させている。リトアニア語でも「サクラ」という名前の、日本を象徴するこの木の精と杉原が対話するシーンもあり、『根付いた桜』という仮題がつけられていたこのオペラを通して、国交樹立以来23年の日本とリトアニアの、そして人類の友愛を深めていけたらと願う。

その願いに賛同した指揮者の西本智実氏は、リトアニア国立交響楽団を指揮した経歴もあり、リトアニア内外で有名な音楽家である。1月5、6、7日と三日連続の公演に向けて、最終稽古がもうすぐ始まる多忙な中、伊香氏は「杉原さんご自身がおっしゃっていたように、意外と彼は特別ではなく、普通の人だったのではないかと思います。結果的に外務省の命令には反したけれど、人間的な葛藤もあったはず。等身大で地に足のついた杉原さんを表現することで、人間らしい人間の存在を描きたい」と抱負を語ってくれた。

東大経済学部大学院卒の伊香氏がオペラに魅了されたいきさつについて、「子供の頃から、何かをいじって形にする粘土細工のような事が好きでした。楽譜や台本という紙に書いてある二次元の世界を、自分の好きな方法で三次元化するという行為が変態的に好き」と分析する。その大好きなオペラの側にいたい一心で、博士課程に進むか就職を決めるかという時期に公募されていた新国立劇場の職員の職を得た。そこに演出家として招かれたディヴィッド・エドワーズ氏の助手を務めた際に初めて「演出家になりたい」と確信し、安定した職場を捨て、エドワーズ氏の招きで2002年イギリス留学を決めた。

その後、伊香少年が初めて観たオペレッタ『こうもり』の、そしてその時と同じ演出家であったロベルト・ヘルツル氏の助手を務める機会に恵まれ、ヘルツル氏の紹介でウィーンに拠点を移し今年で7年が経つ。オペラー筋、ヨーロッパにばかり目を奪われていた伊香氏の考え方を変えた事件は東日本大震災だった。

15歳で家を出るまで育った岩手県宮古市の実家が津波で流された。偶然両親はウィーンに息子を訪ねており無事であったが、「家族が元気である、故郷が無傷で残っているということが当たり前の事ではない」と実感し、「今まで日本、故郷を振り返って来なかった自分が、地元、家族のために何かしたいと思うようになった」という。

現在、復興に関する財団を興した友人を応援し、被災した高校生の進学を助けるプロジェクトに参加しているという。経済的支援だけではなく、未来の東北を担うリーダーを育成するというプロジェクトで、実業界や政界の要人と出会う機会を作ったり、合宿をして東北復興に関するディスカッションをしたりするのだという。また復興の象徴になるようなフェスティバルを東北人の手で築きたいという夢も抱いているそうだ。

リトアニアでの『桜の記憶』世界初演の後は、『オペラ@能楽堂』のフランス・スイスツアーが待っている。この『オペラ@能楽堂』というプロジェクトは、2011年に日本で上演された作品で、シャルパンティエとペルゴレージの作品を、能の様式で上演するという史上初の試みであった。この公演の噂を聞きつけたフランス側から熱望され、実現に漕ぎ着けたこの演目について、伊香氏は次のように語る。「オ

ペラが日本に輸入されて約150年。オペラと日本人の相性は非常によく、世界中の一流歌劇場が入れ替わり立ち替わり招聘される東京のような街は、他に類を見ない。日本人はもともと、海外から取り入れたものを独自に発展させることに長けた民族なので、日本の伝統芸能の様式の中で、西洋のオペラを再生させるということが、そろそろ出来うる時期なのではないかと考えています。」

伊香修吾が発信する日本のオペラが、世界に種を蒔き、リトアニアに広がっていった桜の木のように世界に根付いていく気配を感じることができるのは、日本人として誇らしいことである。

中 東生